

平成 26 年度 学生生活実態調査報告書

この報告書は、平成 26 年 6 月に行われた学生生活実態調査の分析結果を報告するものである。

1. 調査の目的と方法

本調査は、学生の生活実態について正しく把握し、今後の教育・指導の向上に役立てるために学生委員会が実施したものである。調査は各学科の教員の協力の下、授業時に行った。調査対象は本学の全学科・学年であり、合計 1037 名（89.3%）の学生からアンケートを回収した。調査票は、平成 22 年の第一回実態調査で用いた質問項目を再度検討し、改定と追加を行い作成したものを使用した。質問は全 59 項目からなり、内容は以下の 8 つの側面から構成されている。

- ① 属性：性別、年齢、入学形態など
- ② 生活の場と通学：通学時間、住居など
- ③ 生活：食事、飲酒・喫煙習慣、睡眠時間など
- ④ 勉学：学習時間、読書の習慣など
- ⑤ アルバイト：アルバイト状況について
- ⑥ 課外活動：課外活動状況について
- ⑦ ボランティア活動：ボランティア活動状況について
- ⑧ 体調管理：自覚している症状、不安など

2. 結果と考察

学部全体の回収率は 89.3%であり、平成 22 年第一回調査より 0.9%低かった。学科毎の回収率では、理学療法学科が 94.1%と最も高く、看護学科は 80.7%と少し低かった（表①）。また、学年毎の回収率においては最も高かったのが 1 年生の 96.8%で（表②）、4 年生が 71.6%と最も低かった。4 年生の回答率が低かった理由として、実習期間中により授業数が少なかったことが影響していると考えられる。

以下、質問の内容ごとに分析結果を述べていく。なお、分析は有効回答数のみで行っており、パーセンテージは小数点第一位まで記載した。

表① 学科別回答率

	回答数	回答率(%)
看護学科	338	80.7%
理学療法学科	364	94.1%
作業療法学科	176	93.6%
臨床工学科	154	92.2%
学部	1,037	89.3%

表② 学年別回答率

	回答数	回答率(%)
1 年生	276	96.8%
2 年生	282	92.8%
3 年生	257	94.1%
4 年生	214	71.6%
学部	1,037	89.3%

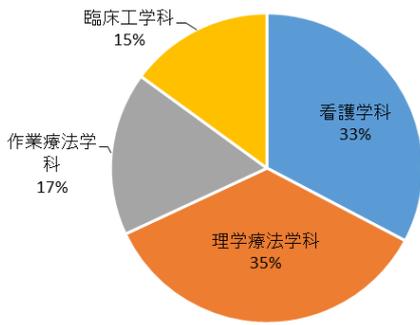


図 1-1 所属学科

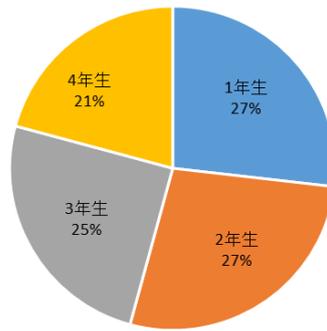


図 1-2 学年

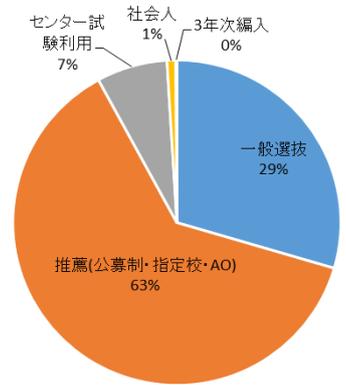


図 1-3 入学形態

(1) 属性

学部全体の男女比は女子が 54.8%、男子が 45.2%と女性の方が若干多かった。所属学科の割合は理学療法学科が 35.3%と最も多く、次いで看護学科が 32.8%、作業療法学科が 17.1%であった(図 1-1)。臨床工学科が 14.9%と最も少なかったが、平成 22 年の開講時と比べると大幅に増加している。学年比をみると 2 年生が 27.4%と最も多く、4 年生が 20.8%と最も少なかった(図 1-2)。入学形態については、推薦(公募・指定校・AO)が 62.5%と圧倒的に多く、次いで一般選抜が 29.5%であった(図 1-3)。前回の実態調査では推薦は 54%程度、一般選抜が 42%程度であったため、入学形態において一般選抜が減少し、推薦入学が増加傾向にあるといえる。

(2) 生活の場と通学

通学時間については、60～90 分未満の学生が 36.3%と最も多かった(図 2-1)。90 分以上かけて通学している学生も 23.3%と多く、約 6 割の学生が通学に 1 時間以上かかっていた。通学方法については、電車とスクールバスを利用している学生が 49.1%と最も多く、徒歩または自転車で通学している学生は 22.9%であった(図 2-2)。通学費では 2 千円から 1 万円程かかっている学生が 30.5%と最も多かった(図 2-3)。また、1 万円以上の通学費がかかっている学生は 42.4%であり、約半数近くいた。このことから、遠方の自宅から長時間かけて通学し、毎月の通学費用も高額な学生が多いといえる。

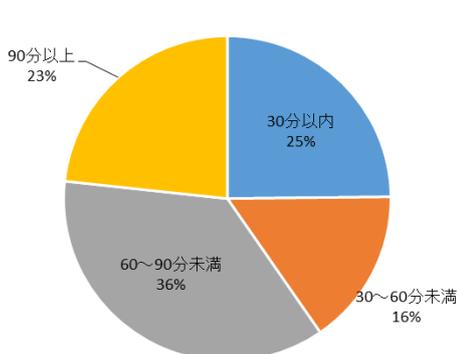


図 2-1 通学時間

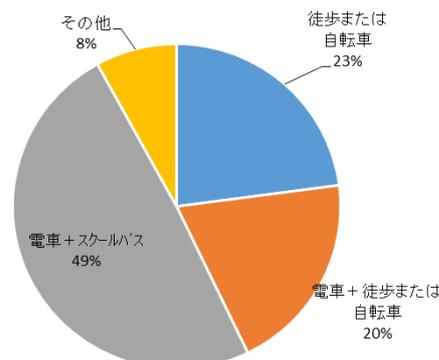


図 2-2 通学方法

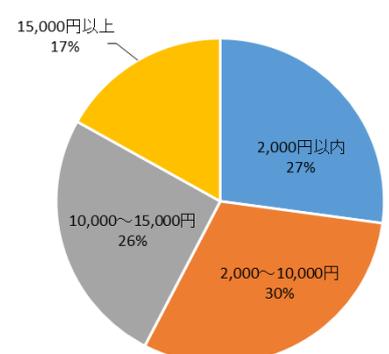


図 2-3 通学費用

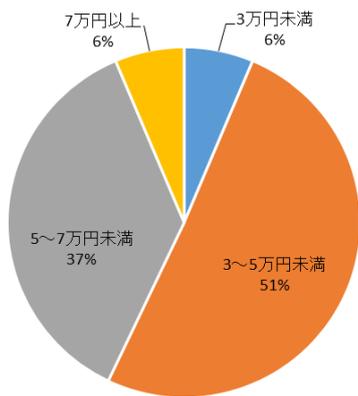


図 2-4 自宅外生の家賃

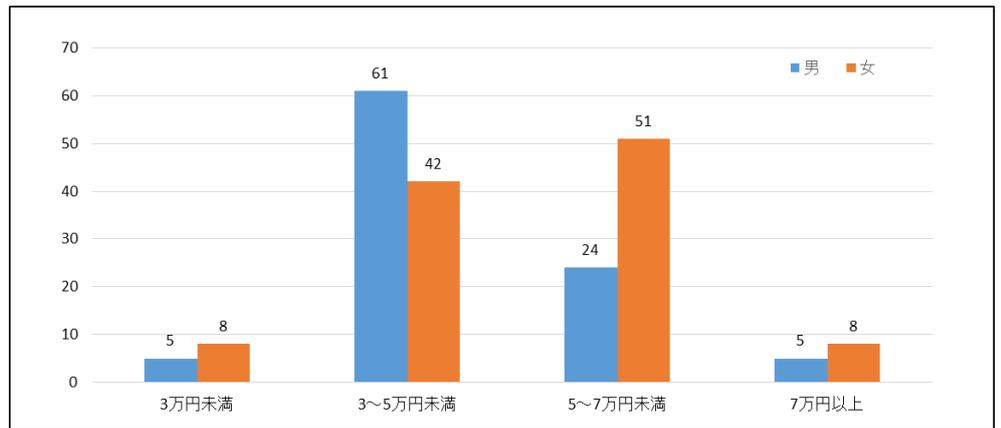


図 2-5 自宅外生の家賃 (男女別)

主たる家計支持者は父親が 78.4%、母親が 17.4%と、そのほとんどが両親であった。住居については、自宅学生は 79.9%、自宅外学生（一人暮らし等）は 20.1%で、大半の学生が自宅から通っていた。自宅外学生については、月々支払っている家賃は 3~5 万円が 50.7%と最も多く、次いで 5~7 万円が 36.6%であった（図 2-4）。男女別に最も割合の多かった家賃の金額をみると、男子学生では 3~5 万円、女子学生においては 5~7 万円という差がみられた（図 2-5）。女子学生の方が一人暮らしをする上でセキュリティ面を考慮すると考えられ、その結果家賃も高くなったと考えられる。

(3) 生活

食生活については、57.7%の学生が毎日朝食をとる習慣があり、とらない学生は 11.5%と少なかった。昼食についても 87.7%の学生が毎日とっており、食べたり食べなかったりという学生は 11.2%であった。夕食においては食べたり食べなかったりという学生が 17.0%おり、不規則な学生が比較的多いといえる（表 3-1）。夕食を食べたり食べなかったりする学生について男女別にみると、女子学生の方が男子学生よりも約 13%多く、女子学生の方が不規則な食事形態であった（図 3-1）。「3 食のいずれかの食事をコンビニなどのお弁当で済ませることがあるか」という質問に対して、76.0%の学生が「よくある」、もしくは「時々ある」と答えている（図 3-2）。これは、本学の近くにコンビニがあることが影響していると考えられる。一方、昼食時にアゴラを利用する頻度は週に 0~1 日が 77.9%と最も多く、あまり学生に利用されていなかった（図 3-3）。これは、アゴラが現在工事中で利用できない状況であることが影響していると考えられる。

表 3-1 食生活

	毎日食べる		食べたり食べなかったり		食べない	
	回答数	回答率 (%)	回答数	回答率 (%)	回答数	回答率 (%)
朝食	595	57.7%	318	30.8%	119	11.5%
昼食	907	87.7%	116	11.2%	11	1.1%
夕食	849	82.2%	176	17.0%	8	0.8%

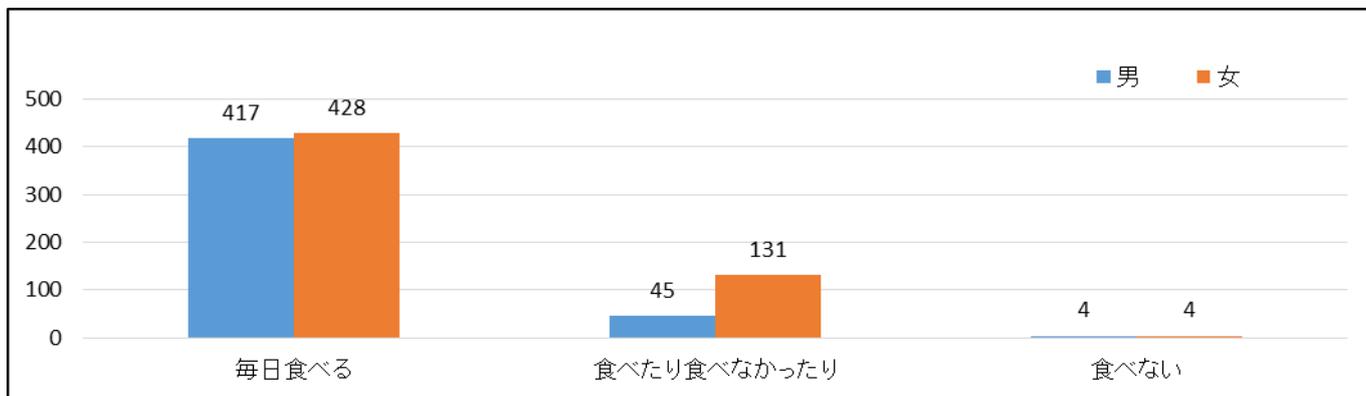


図 3-1 夕食 (男女別)

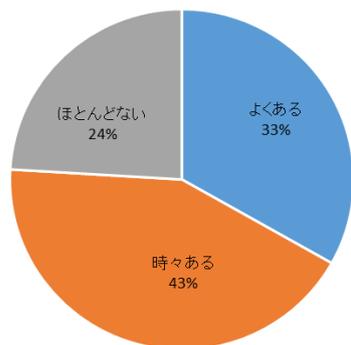


図 3-2 コンビニなどのお弁当での食事

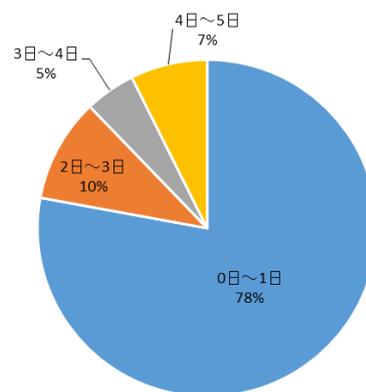


図 3-3 アゴラの利用頻度

全体の 28.6%の学生に飲酒習慣があった。飲酒習慣のある学生の頻度については、「週に 0~1 日程度飲酒する」という学生が 67.9%と最も多く、次いで「2~3 日飲酒する」という学生が 22.5%であった(図 3-4)。習慣的な飲酒というよりも、飲み会等に参加しての飲酒という機会的なものが多いと考える。

喫煙については、わずか 3.0%の学生のみ喫煙習慣があると答えていた。我が国における 20 歳代の喫煙率は男性が 29.9%、女性が 11.1% (全国喫煙者率調査¹) であり、その数字と比べると本学の喫煙率は明らかに低い。これは、本学が掲げる禁煙についての指導が行き届いている結果だと考えられる(図 3-5)。学生規程では学内外問わず禁煙となっており、より一層の指導と医療人としての自覚を促す必要がある。

「身近に不法薬物(大麻や覚醒剤など)を使用している人がいるという話を聞くことがあるか」という問いについては、あると答えた学生は 6.7%にとどまり、ほとんどの学生が耳にしたことがないと答えた。

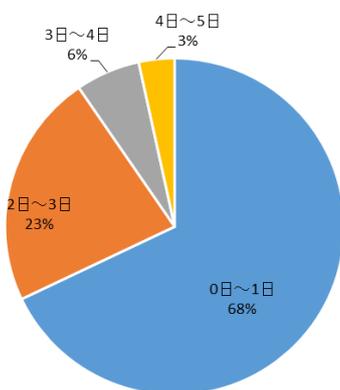


図 3-4 飲酒の頻度 (週)

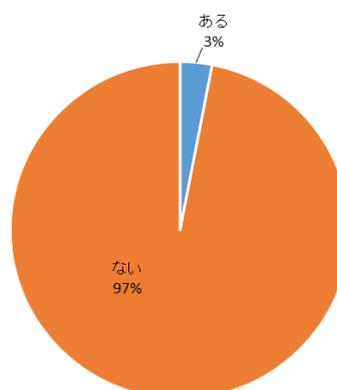


図 3-5 喫煙習慣

¹ 日本たばこ産業株式会社：「平成 25 年 全国たばこ喫煙者率調査」,2013, <http://www.health-net.or.jp/tobacco/product/pd090000.html>

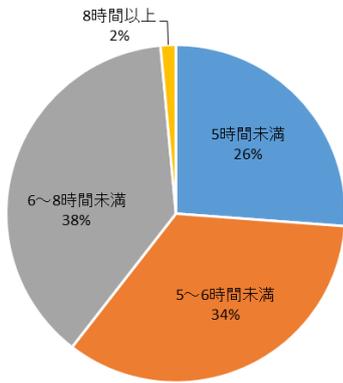


図 3-6 睡眠時間

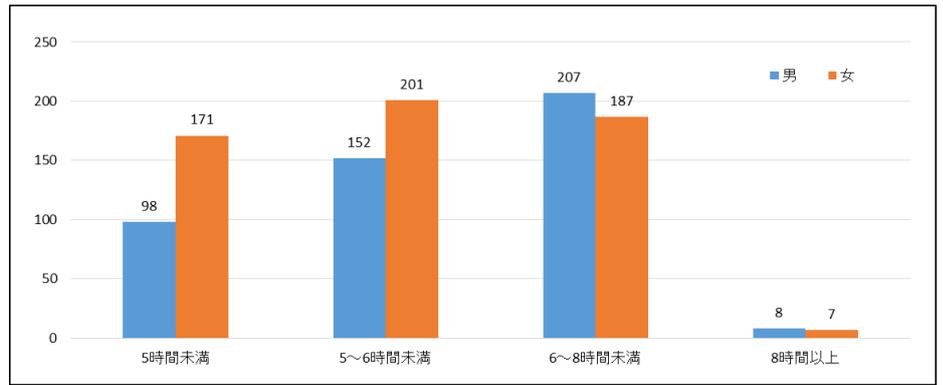


図 3-7 睡眠時間（男女別）

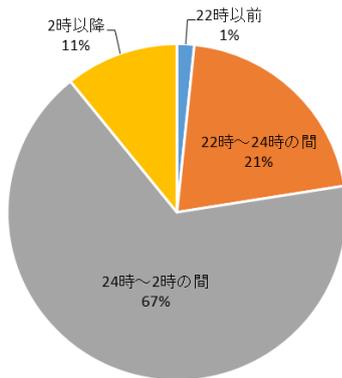


図 3-8 就寝時刻

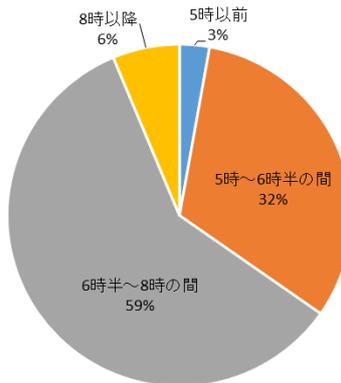


図 3-9 起床時刻

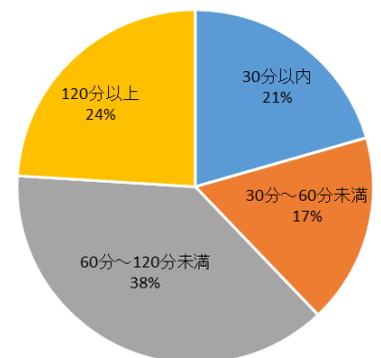


図 3-10 テレビ・PC・ゲームの時間（1日）

睡眠時間について、6~8時間の睡眠時間を確保している学生は38.1%であり、約6割の学生が6時間未満であった（図3-6）。男女別でみると、女子学生の方が男子学生よりも睡眠時間が短い学生が多かった（図3-7）。就寝時刻は24~2時の間に就寝する学生が66.7%と最も多かった（図3-8）。2時以降に就寝している学生は10.8%もあり、夜型で睡眠不足の学生が多いといえる。一方、起床時刻は6時半~8時の間が最も多く59.0%であった（図3-9）。

テレビ・パソコン・ゲームなどに使う時間は1日平均で60分~120分未満が38.1%と最も多く、2時間以上も使用している学生は24.0%いた（図3-10）。近年のスマートフォンの普及に伴い、いつでも手軽にゲーム等ができるようになったことが時間数増加に影響していると考えられる。

友人や家族との交流時間は、両項目ともに1日平均で2時間以上が最も多かった（表3-2）。家族との交流時間においても2時間以上が最も多く、その割合は31.2%と前回の調査より約10%増加している。

表 3-2 交流時間（1日）

	友人		家族	
	回答数	回答率(%)	回答数	回答率(%)
30分以内	80	7.7%	285	27.7%
30~60分未満	107	10.3%	162	15.8%
60~120分未満	248	23.9%	260	25.3%
120分以上	601	58.0%	321	31.2%

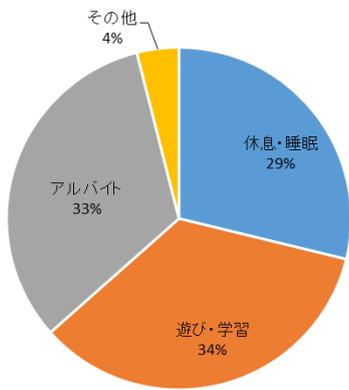


図 3-11 休日の過ごし方

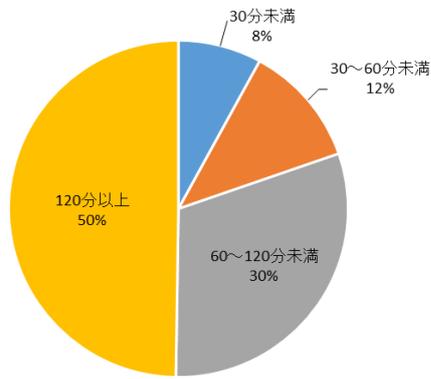


図 3-12 携帯電話の使用時間（1日）

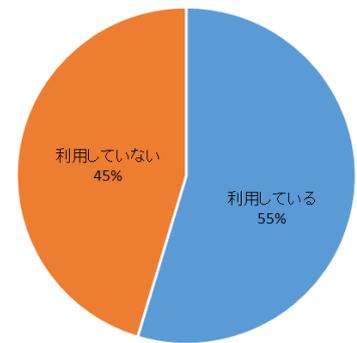


図 3-13 SNSの利用

休日の過ごし方については（複数回答可）、遊びや学習をして過ごしている学生が 34.6%と最も多かった（図 3-11）。他、アルバイトをしている学生が 32.6%で、これは前回の調査より 7%増加していた。

携帯電話の使用時間については、1日平均で 2 時間以上使用している学生が 49.8%と最も多く、約 8 割の学生が 1 時間以上使用していた（図 3-12）。ゲーム等の質問項目でも触れたが、最近のスマートフォンの普及によって携帯電話を使用するといってもその内容は通話やメールのみならず、ゲームやインターネット、SNS が多いといえる。54.6%もの学生が Twitter・facebook・LINE などの SNS を利用していることから（図 3-13）、通学時間や僅かな休憩時間にも SNS を見るなど、その利用率の高さも携帯電話の使用時間増加に繋がっていると考えられる。

生活費（こづかいなどを含む）については、月に 2 万円未満が 93.6%、2～4 万円未満が 6.4%であった。主にこづかいの金額のみを回答していると考えられるが、平成 22 年に行った前回の調査と比較すると全体的に少なくなっている。前回においては 4～6 万円未満の学生が約 18%いたが、今回は全くいなかった。

（4）勉学

週平均の登校日数は、月曜から金曜まで毎日通学している学生が 91.2%おり、3～4 日登校している学生は約 7%であった（図 4-1）。また、週の出席率においては 73.6%の学生が受講科目を全て出席しており、8 割の出席率である学生は 23.8%であった（図 4-2）。登校及び講義出席率は極めて良好だといえる。しかし、約 65%の学生が授業時間数に対して「多い」、または「非常に多い」と感じており、医療系ならではの授業の多さが一部の学生には負担になっているようである（図 4-3）。

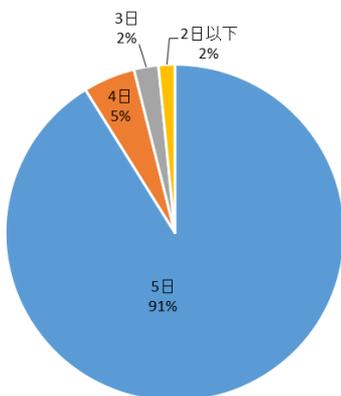


図 4-1 登校日数（週平均）

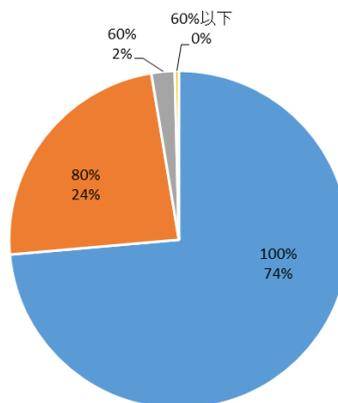


図 4-1 平均出席率（週）

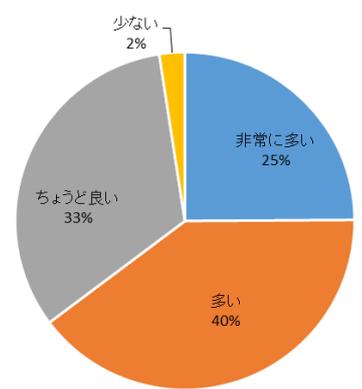


図 4-3 授業時間数に対する感じ方

表 4-1 学期中の授業に関する予習・復習時間（男女別）

	男		女	
	回答数	回答率(%)	回答数	回答率(%)
30分以内	106	38.8%	151	53.2%
30～60分未満	86	31.5%	73	25.7%
60～120分未満	70	25.6%	47	16.5%
120分以上	11	4.0%	13	4.6%

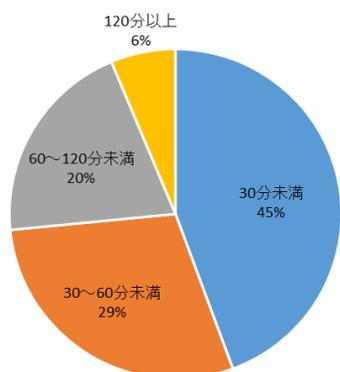


図 4-4 授業の予習・復習時間（学期中）

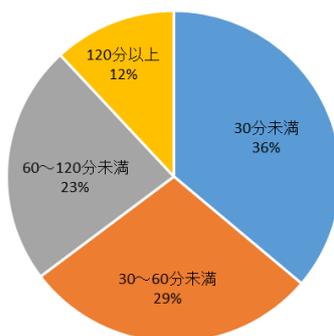


図 4-5 学習時間（学期中）

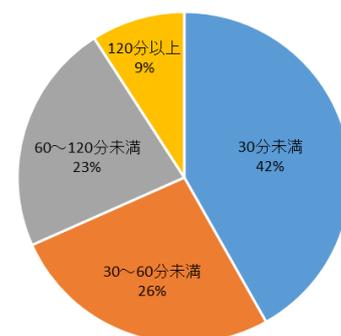


図 4-6 学習時間（長期休業期間中）

授業に関する予習・復習時間は、1日30分未満が44.4%、30～60分未満が29.1%と決して多いとはいえない（図4-4）。男女別では、男子学生のほうが女子学生よりも予習・復習をしている（表4-1）。女子学生は30分未満が大半であるのに対して、男子学生は30～60分未満・60～120分未満と答えた学生が半分を占めていた。また、学期中の学習時間全体についても約65%の学生が1時間未満と少ない結果であったが、しかし、1日2時間以上学習している学生が約12%いるのも注目すべき結果だといえる（図4-5）。夏期休業等の長期休業期間になると1日の学習時間は減り、30分未満の学生が41.8%となっている（図4-6）。

大学の図書館の利用頻度については、月に数回利用している学生が46.4%と最も多かった。全く利用していない学生は27.4%であり、全体としてあまり利用されていないことがわかった（図4-7）。また、調べものをする上で図書館を利用している学生は11.7%にとどまり、79.8%の学生がインターネットを利用していた（図4-8）。インターネットで手軽に検索し、簡単に調べものができる今日において、学生の図書館利用を促すには工夫が必要だといえる。

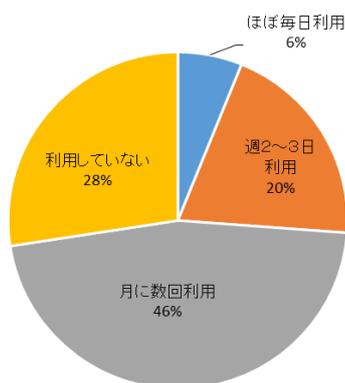


図 4-7 大学図書館の利用頻度

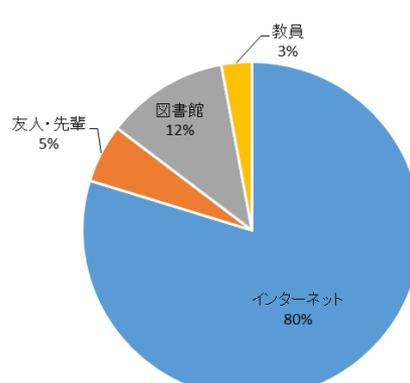


図 4-8 調べもので利用するもの・人

表 4-2 新聞を読む習慣（学年別）

	毎日読む		時々読む		ほとんど読まない	
	回答数	回答率 (%)	回答数	回答率 (%)	回答数	回答率 (%)
1年生	22	9.9%	65	24.9%	185	65.2%
2年生	22	12.3%	59	26.5%	204	61.2%
3年生	24	10.7%	53	20.6%	179	68.7%
4年生	16	30.0%	52	20.0%	149	50.0%

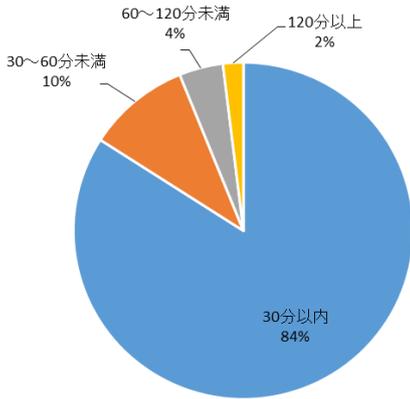


図 4-9 読書時間

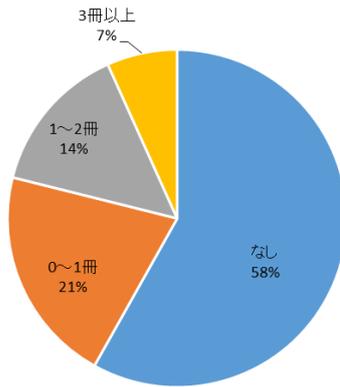


図 4-10 購入書籍数（月）

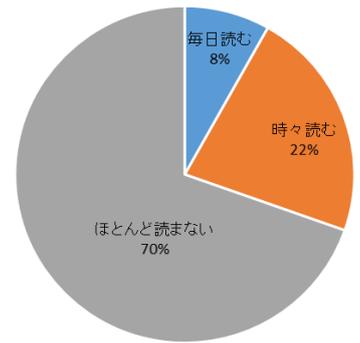


図 4-11 新聞を読む習慣

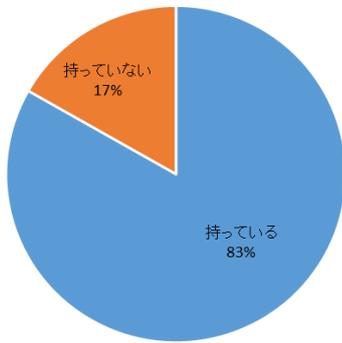


図 4-12 パソコンの所持

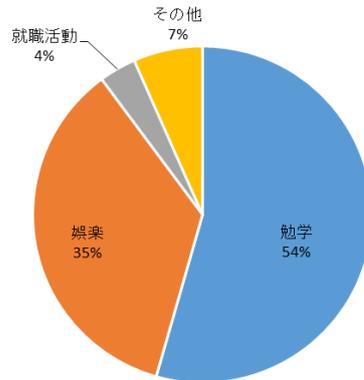


図 4-13 パソコンの用途

マンガや雑誌を除いた読書の時間は、1日平均で30分以内が84.1%であり、前回の調査よりも8.0%増加していた（図4-9）。また、一ヶ月に購読する書籍（マンガや雑誌を除く）の数は0冊が58.1%、1冊が20.8%となっており、学生の活字離れが明らかである（図4-10）。授業の学習に追われている可能性も考えられるが、一般教養的な書籍や文学などについての関心の低さがうかがえる。それは新聞を読む習慣を問う項目にも表れている。新聞を毎日読む学生は8.2%しかおらず、69.6%の学生がほとんど読んでいないという結果であった（図4-11）。学年が上がるにつれて新聞を毎日読む学生の割合は増加しているが、その数字は決して多いとはいえない（表4-2）。就職試験等において時事問題を聞かれることも多く、少なくとも4年生の段階では新聞を読む習慣を身につけている必要があるといえる。今回の調査結果を踏まえると、授業科目以外の一般教養を高めることは今後の課題だといえよう。

83.2%の学生がパソコンを所持しており、その用途の多くは勉学で54.4%であった（図4-12、図4-13）。使用目的で次に多かったのは娯楽の35.5%であった。

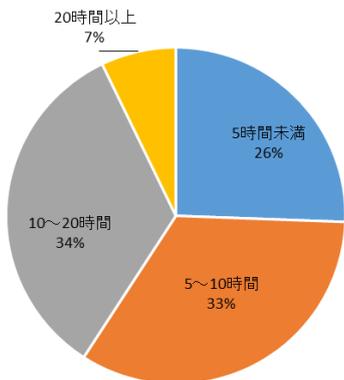


図 5-1 アルバイトの時間 (週)

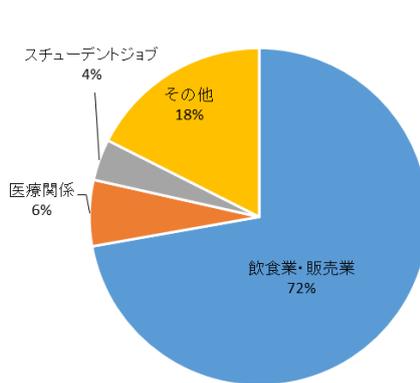


図 5-2 アルバイトの内容

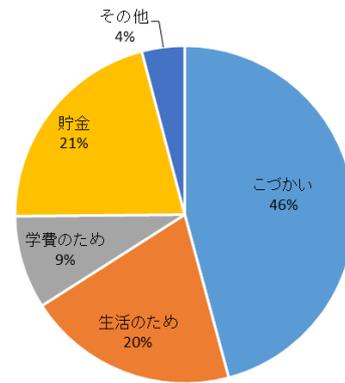


図 5-3 アルバイトの目的

(5) アルバイト

学生全体の 70.4%がアルバイトをしており、平均で週に 10～20 時間アルバイトをしている学生が 33.7%であった (図 5-1)。アルバイトの内容は飲食・販売業が最も多く 72.2%であった (図 5-2)。本学で行っているスチューデントジョブを行っている学生は全体の 4.0%にすぎなかった。アルバイトの目的については (複数回答可)、45.8%の学生がこづかいのためにアルバイトをしていた (図 5-3)。次いで貯金のために 21.1%、生活のために 20.1%という結果であった。

(6) 課外活動とボランティア活動

課外活動を継続的または定期的に行っている学生は 19.3%で、何もしていない学生は 59.8%であった (図 6-1)。課外活動の内容については (複数回答可)、学内サークル・部活動を行っている学生が 55.6%であった (図 6-2)。学外のサークルに参加している学生は 20.2%おり、その他の活動内容としてボーイスカウトなどがあつた。

ボランティア活動については、していない学生が 78.0%と、ボランティア活動に積極的であるとはいえない (図 6-3)。ボランティアを行っている約 22%の学生について、その内容をみると地域系が 36.4%と最も多く、次いで福祉系が 28.0%であった (図 6-4)。学科別にみるとその特徴がよく表れており、看護学科は福祉系のボランティアをしている学生が多く、理学・作業療学科は地域系が多かった (図 6-5)。

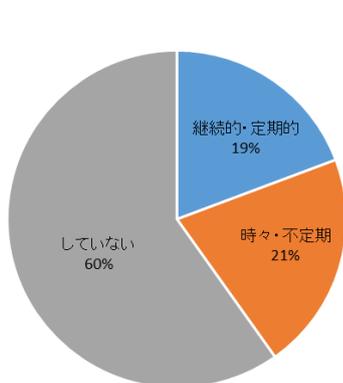


図 6-1 課外活動

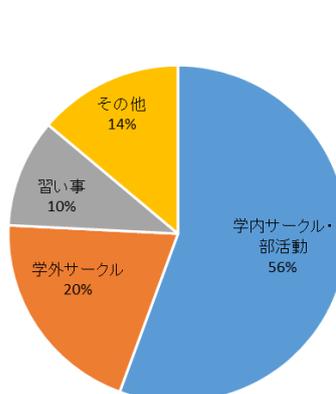


図 6-2 課外活動の内容

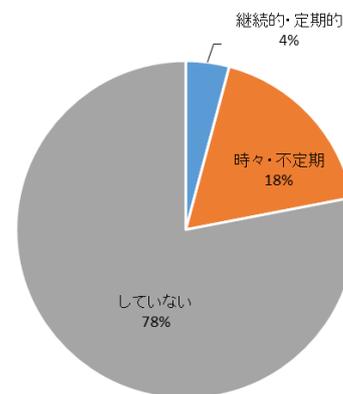


図 6-3 ボランティア活動

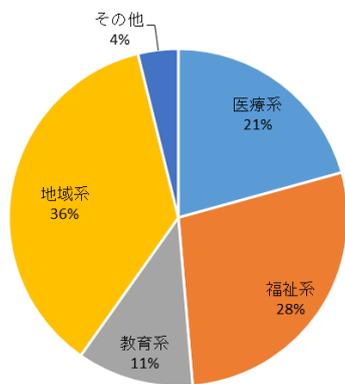


図 6-4 ボランティアの内容

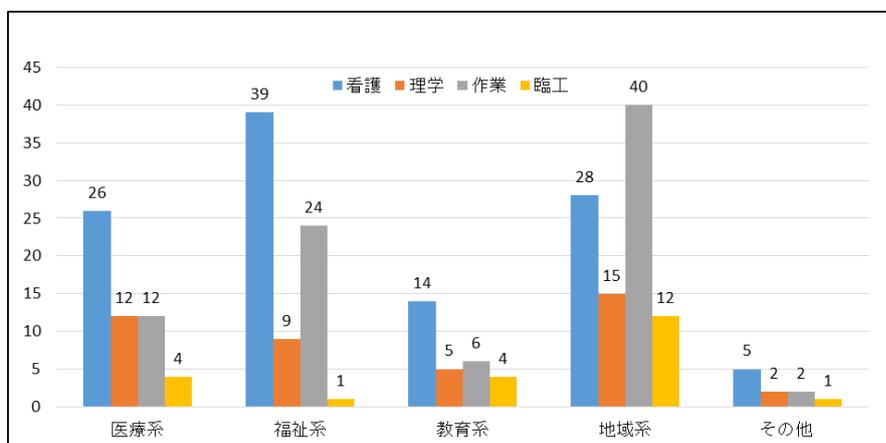


図 6-5 ボランティアの内容 (学科別)

(7) 体調管理

時々自覚される症状については(複数回答可)、頭痛・腹痛が40.2%、疲れやすいと感じている学生は36.4%、意欲低下を訴えている学生は31.0%などであった(表7-1)。29.0%の学生が昼間の過剰な眠気を覚えており、講義を受ける上で支障をきたしていると考えられる。

現在感じている不安については、勉学・成績・単位のことや実習について不安を覚えている学生が大半を占め、68.7%であった(図7-1、7-2)。その他、自己の性格については28.4%、進学・就職についての不安が18.2%などであった。学年ごとの比較では、「勉学・成績・単位」についての不安は1年次に最も高く、学年が上がるごとにその割合は減少してくる(図7-3)。一方、学年が上がるにつれてその不安が大きくなるのは「進学・就職」であった。不安を抱えている際に相談する相手については、約半数の学生が友人に相談すると答えた(図7-4)。親に相談するという学生は全体で28.4%おり、男女別にみると女子学生の方が男子学生よりも親に相談する割合が高かった(図7-5)。この結果は、近年注目されている「友達親子」の傾向が表れていると考えられる。教員に相談するという学生は僅か2.3%であった(図7-4)。

表 7-1 時々自覚される症状

	回答数	回答率(%)
めまいやふらつき	296	27.6%
頭痛・腹痛	431	40.2%
胃痛・胃部不快感	171	16.0%
吐き気・下痢	173	16.2%
冷え性	244	18.2%
目の疲れ	398	29.6%
昼間の過剰な眠気	390	29.0%
不眠・睡眠過多	312	23.2%
意欲低下	386	31.0%
気分が落ち込む	355	28.5%
疲れやすい	453	36.4%
その他	51	4.1%

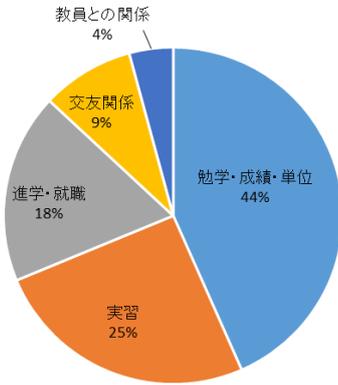


図 7-1 現在の不安①

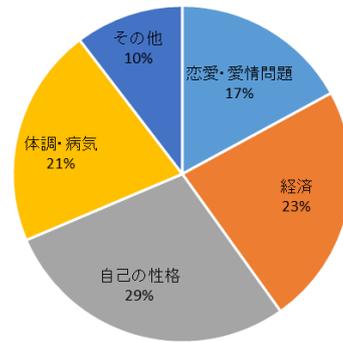


図 7-2 現在の不安②

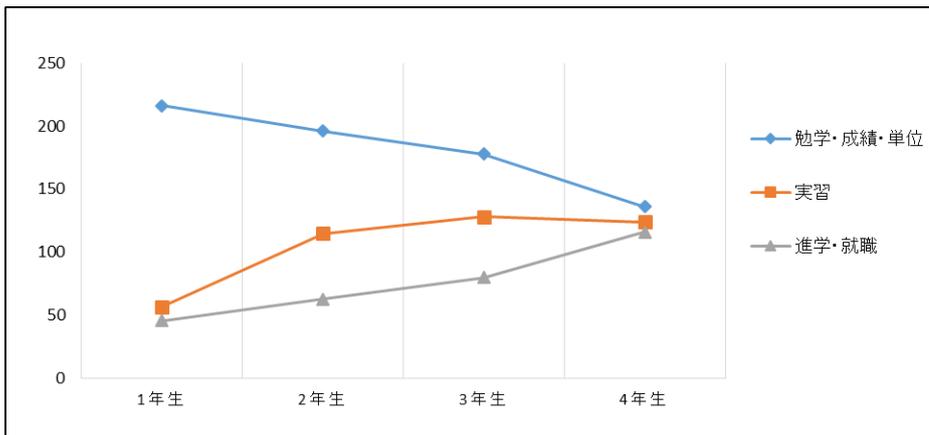


図 7-3 現在の不安 (学年別比較)

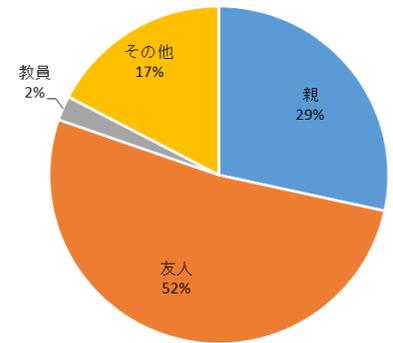


図 7-4 相談相手

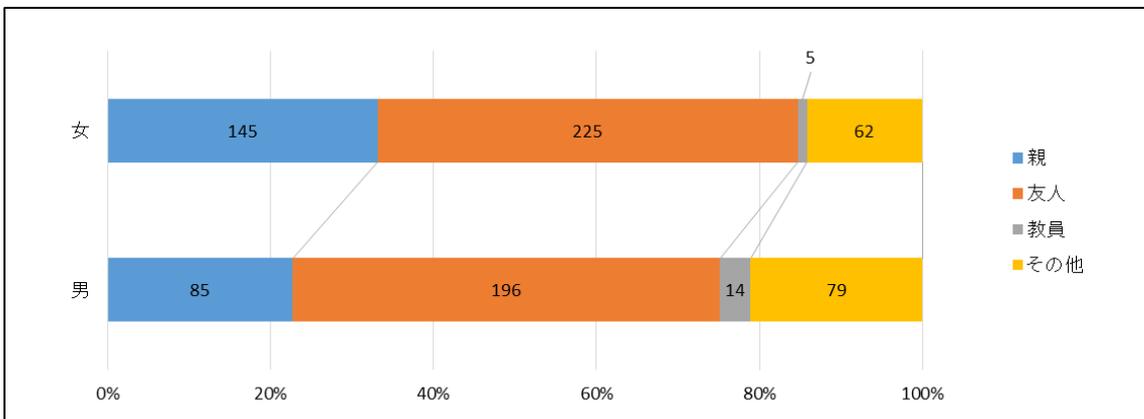


図 7-5 相談相手 (男女別)

3. 総括と今後の展望

学生の生活実態を正しく把握し、今後の教育・指導の向上に役立てるために実施した本調査では、90%近い学生から回答を得ることができた。生活面や勉学など、8つの内容について調査を行ったところ、通学については1時間以上もの時間と1万円以上の高額な通学費をかけて通学する学生が多かった。また、住居については、約20%の学生が一人暮らしで家賃が3万~5万円程かかっているという結果であった。本学では自宅外通学生に対する経済支援を行なっているが、以上のような結果を踏まえると、その他の経済支援についても更なる充実を図

っていく必要があるのではないだろうか。

食生活については概ね良好であったが、女子学生においては夕食が不規則になりがちな学生が少なくなかった。保護者と連携をとりながら、健康管理について指導が必要といえるだろう。喫煙の習慣者は僅か 3%程と極めて低く、飲酒も機会的なものが殆どであった。これは医療系大学として喜ばしい結果であり、今後も更なる健康教育を推し進めることが求められる。睡眠に関しては夜型生活の学生が非常に多かった。6 時間程度の睡眠時間の確保や 24 時までには就寝する生活リズムの構築、また、実習中において睡眠時間が極端に短くならないよう注意喚起を行うなど、適切な指導が必要といえる。

多くの学生は友人や家族と十分な交流時間を持っていたが、携帯電話やスマートフォンに向かっている時間も非常に長かった。現在はスマートフォンなどの無い生活は考えられないため、その使用時間が長くなっていると考えられる。

授業の出席率をみると、本学の学生は極めて真面目で熱心だといえる。しかし、授業時間外における予習復習の時間は決して多いとはいえない。医療系ならではの授業数の多さと、約 70%以上もの学生がアルバイトをしている状況を見ると、自宅で勉強する時間を確保できないのが実情だと考えられる。

書籍や新聞を読む学生が減ってきているのはいずれの大学でも指摘されていることであるが、本学の学生も同様であった。学生に新聞や書籍を読む習慣をつけてもらうことが今後の課題だといえる。就職活動を行う 4 年生には、時事問題や医療に関する最新のニュースを読み解く力が特に必要となるため、具体的な対策を考えていかねばならないだろう。

体調に関しては、頭痛や腹痛、疲れやすさなどを自覚している学生が多かった。また、勉強や成績に対して不安を覚えている学生が多かったが、それらの悩みは友人や家族に相談し解決を図っていることがうかがえる。より健全なキャンパスライフを送ってもらうために、本学にある保健管理室・学生相談室・養護室などの活用も促していく必要があるのではないか。

以上のように、本調査により学生の生活実態を把握することができた。今回の調査を終えて、現状把握のみに留まることなく、教育・指導の向上に活かしていかなければならないと考えている。具体的に対策を練っていく必要もあるだろう。本調査は学生生活実態調査としては 2 回目の調査であったため、比較は前回分のみ行った。今後も継続して調査を行い本学の学生の傾向を把握していくことで、学生委員会として更なる藍野大学の発展に努めていきたい。

謝辞

貴重なお時間を頂き、本調査にご協力頂いた学生の皆様、及び教職員の方々に深く感謝申し上げます。